

荒川の直線化・拡幅および放水路建設等の推進に中心となって
尽力をつくしました。



彰功碑



治水橋



齋藤祐美

人物紹介 齋藤祐美

齋藤祐美（さいとうゆうび・1866（慶応2）～1943（昭和18）年）は、現在さいたま市西区となっている北足立郡馬宮（まみや）村飯田新田で代々続く外科医の次男として生まれました。

家業を継ぐべく医学生として勉学に励んでいた1890（明治23）年、荒川の氾濫で自宅周辺が水没するのを目の当たりにし、病気や怪我以前に水害で命の危機に曝されている故郷を安全な地とすべく、新聞記者を経て政治家となりました。

明治の終わりから大正時代を経て昭和の始めまで、通算7期27年間埼玉県議会議員を務め、途中副議長を1期、議長を3期歴任しています。

利根川・荒川の両河川の洪水にしばしば見舞われていた埼玉県では、1910（明治43）年の大水害を期に埼玉治水会が結成されました。齋藤祐美は両河川の改修を県議会活動を通じて埼玉県だけでなく、帝都・東京府や国をも動かし、特に荒川の直線化・拡幅および放水路建設等の推進に中心となって尽力をつくしました。

齋藤祐美は「治水翁」呼ばれ、荒川に架かる治水橋（治水翁に因む）のためには功績をたたえる彰功碑が建っています。

▶ 主な功績

斎藤祐美は、治水問題を終生の事業とし、自ら荒川治水会を設立、治水の啓蒙活動等に当たり、県会でも治水を訴えました。当初、人々は無関心でしたが、1910（明治43）年の大洪水で人々の関心が高まり、これを機に埼玉治水会を結成、同年9月9日には東京埼玉連合治水会を組織、評議員等として活躍しました。荒川河川改修にも尽力し、農地買収や家屋移転を断行するなど献身的な努力を払いました。本県治水事業の基盤を築いた政治家として「治水翁」と称されました。荒川にかかる「治水橋」（さいたま市西区）は氏の功績により命名されました。



治水橋

▶ びん沼の生みの親

びん沼は、荒川の河川改修で取り残された旧荒川の一部です。荒川の河川改修は大正期から1945（昭和20）年代にかけて、洪水対策として蛇行していた川筋を直線化する形で実施されました。そして、その河川改修、治水事業を推進したのは、旧荒川（びん沼）のほとりに実家のあった斎藤祐美です。

斎藤祐美は、県会議員として荒川の河川改修の合意を取り付け、この大事業を成し遂げました。洪水が日常であったびん沼周辺住民が今平穏な日々を暮せるのは斎藤祐美の功績に負うところが大きいです。



空からのびん沼

コ ラ ム 三人の治水翁

治水事業に生涯をかけ取り組み多大なる貢献をし、皆から「治水翁」と称された人物は3人いました。

〇〇治水頌徳碑というのはよくありますが、△△治水翁頌徳碑という形で偉業が刻されているのは全国でたった3人しかいません。

三人の治水翁

名前	大橋房太郎	斎藤祐美	湯本義憲
尊称	淀川の治水翁	荒川の治水翁	湯本治水翁
出自	榎本村（現大阪市鶴見区）放出の庄屋	浦和の外科医の次男	行田の大地主の養子
生年～没年	1860（万延元）年～1935（昭和10）年	1866（慶応2）年～1943（昭和18）年	1849（嘉永2）年～1918（大正7）年
主たる功績	淀川の治水	荒川の治水「治水橋」	河川法の制定 国による直轄河川改修 木曾三川の分離事業
頌徳碑の設置場所	四條畷神社	治水橋の左岸	行田の前玉神社
墓地	放出の正因寺。墓前に六郷修堤碑の建立	びん沼の薬師堂	行田市の盛徳寺
	大阪府会議員	県会議員・県会議長	衆議院議員、岐阜県知事

アクセス

治水翁の碑

交通：JR「大宮駅」下車、馬宮団地・ららぽーと富士見・所沢駅東口行きの西武バス約30分、「治水橋堤防」停留所下車
住所：埼玉県さいたま市西区飯田新田

びん沼（びん沼自然公園）

交通：東武東上線「鶴瀬駅」東口から老人センター行きの循環バス乗車約20分、「びん沼」停留所下車
住所：埼玉県富士見市東大久保3732



治水翁の碑



びん沼（びん沼自然公園）

